

第 31 回

小学館 ノンフィクション大賞

最終選考結果のお知らせ

大賞

『極彩色の牢獄』

宇都宮 直子(うつのみや なおこ)

小学館は本日、『週刊ポスト』『女性セブン』2誌主催による『第31回小学館ノンフィクション大賞』の最終選考会（午後5時から）を行い、受賞作を決定いたしました。

今回は大賞に『極彩色の牢獄』を選考しました。

大賞受賞者には賞金として300万円が贈られます。
受賞を祝う会は、単行本刊行に合わせて執り行う予定です。

PRESS RELEASE

2025年1月17日

第31回「小学館ノンフィクション大賞」最終選考結果のお知らせ

主催：株式会社小学館 週刊ポスト／女性セブン

大賞

『極彩色の牢獄』

宇都宮 直子(うつのみや なおこ)

【梗概】

誰も知らない、私だけの物語―“頂き女子りりちゃん”を名乗って複数の男性から総額2億円をだまし取り、さらにそれらの“所得”を申告せず4000万円を脱税したとして逮捕され、懲役8年6か月、罰金800万円の判決が下った渡邊真衣被告（25才）。

逮捕前に配信していた動画で見せた金髪にピンクのスウェット姿や「おぢ」と呼ぶ年上男性たちから金銭を搾取するテクニックをまとめた「マニュアル」を販売していたこと、獄中からツイッターで留置所での日々を綴った「日記」や生い立ちを綴った有料手記の配信を行ったことなどから一部でカルト的な話題を呼んだ彼女は、だまし取った金銭の大半をホストクラブにつぎ込むいわゆる“ホス狂い”でもあった。

19年の歌舞伎町ホスト殺人未遂事件をきっかけに、歌舞伎町に住み込み、ホストクラブやホス狂いの取材を始めた週刊誌記者である著者は、歌舞伎町の住人だったかつての渡邊被告がSNSでつぶやいた一言に引き寄せられるようにして、接見取材を始める。

裁判で次々と暴かれて行った嘘にまみれた“生い立ち”や“プロフィール”の先にある、「私だけの物語」を明らかにすべく名古屋拘置所に通う著者に、拘留された渡邊被告は接見や手紙のやりとりを通して「暴力的な父親と親子関係が逆転した母親との歪んだ関係や10代の頃に受けた性被害、苦しい思い出ばかりの地元から逃れ、手に入れた居場所が歌舞伎町でありホストクラブだった」と“本当の生い立ち”を聞かせる。

渡邊被告とのやりとりを経て著者はいつしか、「彼女の罪とは何なのか」「りりちゃん”を作ったのは誰なのか」と逡巡し始める。

財産のほとんどを騙し取られて「遺書」を書くほどに追い詰められた被害者の男性、犯罪と理解してなお渡邊被告に強く引き込まれる「りりヲタ」の女性たち、「一步間違えれば私が彼女だった」と話す歌舞伎町の女のコ、自らも罪を被る形で逮捕された過去の指名ホスト、「かわいそうな人」「守ってあげたい」「憎い」と渡邊被告が感情を波立たさせる母親―接見と裁判傍聴、関係者の言葉や行動を通して、改めて「りりちゃん」はなぜ生まれてしまったのか、彼女の「罪」とは何なのか、そして今後、同様の事件を生まないためには何が必要なのかを考える。

PRESS RELEASE

2025年1月17日

｜PROFILE｜ 宇都宮 直子(うつのみや なおこ)

年齢： 47歳

住所： 千葉県

職業： フリーランス記者

1977年3月27日千葉市生まれ。多摩美術大学美術学部卒業後、出版社勤務などを経て、フリーランス記者に。
『女性セブン』『週刊ポスト』などで事件や芸能スクープを中心に取材を行う。著者に『ホス狂い』（小学館新書、2022）がある。

PRESS RELEASE

2025年1月17日

第31回

『小学館ノンフィクション大賞』 について

『小学館ノンフィクション大賞』とは？

「小学館ノンフィクション大賞」は、1993年、創刊25周年を迎えた『週刊ポスト』が『SAPIO』とともに、21世紀へ向け新しい感覚で時代を切り拓いていく新進気鋭のライターの登竜門となるべく、「21世紀国際ノンフィクション大賞」として新設、第7回より「小学館ノンフィクション大賞」と改称したものです。受賞作は『絶対音感』（第4回）、『マグロ土佐船』（第7回）、『ネグレクト』（第11回）、『小倉昌男 祈りと経営』（第22回）など、このジャンルでは異例のベストセラーとなっていることから、当賞がノンフィクションの新しい地平を拓き、新しい才能を発掘するものであることを示していると自負しております。

募集作品は未発表作品に限り、海外冒険旅行や、博物誌、観察記、歴史発掘、ビジネスドキュメント、スポーツドキュメント、科学ドキュメントなど、さまざまな視点から「時代」を捉えたものを、国内外を問わず広く世界から求めます。原稿枚数は、400字詰め原稿用紙200～300枚程度で、応募資格は、プロ、アマ、性別、国籍、年齢を問いません。

31回を数える今回は、2024年8月末日に募集を締め切り、100に迫る力作が寄せられました。この中から次の5作が、本日午後5時から小学館（東京・千代田区）で開かれた最終選考にかけられ、酒井順子、森健、河合香織の各選考委員により受賞作が決定いたしました。

PRESS RELEASE

2025年1月17日

最終候補作

『近親性交—語られざる家族の闇』

阿部恭子（あべ きょうこ）

『極彩色の牢獄』

宇都宮直子（うつのみや なおこ）

『親友失格』

小林元喜（こばやし もとき）

『箱根駅伝“敗れざる男”—— 稀代のランナー大塚正美の「破天荒」伝説』

飯倉章（いいくら あきら）

『ヒズボラと歪んだ三日月』

伊藤めぐみ（いとう めぐみ）

※タイトル五十音順

賞金 大賞＝ 300万円（複数受賞の場合は分割）

発表 受賞作は2025年2月頃発売の『週刊ポスト』『女性セブン』及び
小社ホームページで発表いたします。受賞作は単行本として刊行予定です。

選考委員 酒井順子（エッセイスト）、森健（ジャーナリスト）、河合香織（ノンフィクション作家）

※受賞を祝う会は、単行本の刊行に合わせて執り行う予定です。